

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 5 月 16 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370814

研究課題名(和文) 中世東地中海史におけるマイノリティ・ネットワークの研究

研究課題名(英文) Research on minority network in the history of eastern Mediterranean region

研究代表者

太田 敬子(Ohta, Keiko)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：40221824

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：9世紀から10世紀までの東地中海地域のキリスト教徒マイノリティのネットワークと社会的地位に関して文献研究とそれを補う意味での現地調査を行った。それによる成果は、(1)境界領域(アナトリア東部から北イラク)におけるキリスト教徒は、教会や修道院を拠点とした独自のネットワークを構築し、それを介してイスラーム社会中央部の政治・社会・文化的動向に敏感に反応しただけでなく、自己主張もしていた。(2)ファティマ朝時代のエジプトのアルメニア人は独自のネットワークを構築し、エジプト社会全体に影響を及ぼしていた。(3)エルサレム王国内のフランク人・現地キリスト教徒双方に独自のネットワークが見いだされた。

研究成果の概要(英文)：I examined on the minority network and their influence and social status in the eastern Mediterranean region, mainly by detailed research on literary sources with field survey. The result is following;

(1) In the border area (from eastern Anatolia to northern Iraq), Christian minorities constructed their own networks, by which they could get informations of political, social, and cultural movements of the center of the Islamic society and reacted them. (2) In Fatimid Egypt, Armenians have constructed their own network, through which their influence extended not only to lower but also to upper Egypt. (3) In the kingdom of Jerusalem, both Franks and the natives Christians have retained their own network and sustained the lives and status.

研究分野：前近代中東社会史

キーワード：地中海史 マイノリティ イスラーム社会 中東キリスト教会 ネットワーク

1. 研究開始当初の背景

申請者は、中東におけるイスラームの拡大と中東社会のイスラーム型への変化に関する歴史的研究を継続的に行ってきた。特に、東地中海海域(シリア・アナトリア・エジプト・イラク)のキリスト教社会が、ムスリムの支配下においてどのように変化し、イスラーム化が進行したのか具体的な事例研究を中心に検討してきた。一方で、中東のムスリム勢力と外部・外来キリスト教徒勢力(ビザンツ帝国や十字軍)との関係史にも注目してきた。それらの総合的成果として、ビザンツ帝国とムスリム国家の関係史をフロンティアの観点から分析した『ジハードの町タルスース-イスラーム世界とキリスト教世界の狭間-』、十字軍運動を東地中海の海洋史の文脈から捉えた『十字軍と地中海』を上梓した。2011~2013年度の科学研究費補助金基盤研究(C)においては、研究課題「中世東地中海を巡る国際関係及び海運史の再検討」が採用され、一定の成果を得ることができた。これらの研究過程において、東地中海を巡る国際関係史において、ムスリム王朝やビザンツ帝国・十字軍国家支配下でマイノリティ・キリスト教徒-アルメニア使徒教会、シリア正教会、コプト教会、東シリア(ネストリウス派)教会-が非常に重要な役割を担い、大きな影響力を有していたことが明らかになった。それは境界領域において顕著だけでなく、中央政権、特にファーティマ朝下のエジプトにおいて明白であり、アルメニア人宰相の政策が国際関係だけでなく国内統治体制にもダイナミックな変革をもたらしていたという認識を得るに至った。また、申請者は2011年度に続けて発表した論文「ナジュランの安全保障契約を巡る諸問題(1)-使徒ムハンマドの異教徒政策の伝承とその影響」、「ナジュランの安全保障契約を巡る諸問題(2)-アラビア半島からの退去令の時代背景と影響」において、マイノリティ・キリスト教徒が安全と地位・身分を確保するために「ムハンマドの契約書」を最大限に利用(捏造・拡大解釈)するという手段を駆使していたことも明らかにした。これらを踏まえて、本研究では東地中海域に隣接する諸国家の政策と国際関係におけるマイノリティ・キリスト教徒に焦点を当てて再検討することを目的とした。

2. 研究の目的

本研究では、ムスリム勢力とキリスト教勢力の関係にダイナミックな変化が見られる9世紀から13世紀にかけての東地中海世界、具体的にはアッバース朝の対外政策の転換期と考えられる第7代カリフ・マームーン(813-833)頃から十字軍国家が聖地における拠点を喪失した13世紀末までを検討の対象とする。研究期間内の達成目標は以下のように考えている。

(1) 9世紀から十字軍が到来する11世紀末までのアッバース朝イスラーム帝

国とビザンツ帝国の境界領域(アナトリア東部・北シリア・北イラクに跨がる)におけるキリスト教徒の動向を時系列的に纏め、両帝国中央との交渉や対立、異端運動(イスラーム・キリスト教両者における)との関わりを検討・分析することによって、境界領域におけるマイノリティ・ネットワークの役割と影響力を考察する。

(2) ファーティマ朝におけるアルメニア人宰相について多言語史料(アラビア語やアルメニア語だけでは記述に偏向性が否めないため)に基づいて検討する。まず、彼らの軍人としての登用の経緯、アルメニア人軍団の役割と政治的影響力を分析し、イスラーム社会におけるマイノリティの政治・社会進出について考察を行うと共に、それを支えたと考えられるアルメニア人ネットワークの実態と特徴を解明する。また、彼らとそのネットワークを通じてキリスト教世界(ビザンツ帝国やヨーロッパ諸国)と独自の繋がりを持っていたことが東地中海史の展開に与えた影響を実証的に解明する。

(3) 十字軍時代のマイノリティ・ネットワークの実態を解明し、その特徴と影響力を分析する。具体的には、キリキア・アルメニア王国及びシリア・イラク北部のアルメニア群小侯国が、十字軍勢力、ビザンツ帝国、セルジューク朝系勢力、非セルジューク朝系トルクマーン勢力、アイユーブ朝及びクルド人勢力とどのように関わっていたかを検討し、アルメニア人マイノリティ・ネットワークの国際的影響力を分析すると共に、エジプトにおけるアイユーブ朝に対するコプト・ネットワークの関係性とその影響力、シリアにおける同王朝に対するシリア人キリスト教徒ネットワークの関係性とその影響力を検討する。最終的には、3者の比較研究を行う。

以上のような段階的な目標の達成を目指し、最終的には3つの目的の検討結果を総合して、東地中海域のマイノリティ・ネットワークに関する包括的考察を目指す。

3. 研究の方法

研究方法の枠組みとしては、多言語の文献研究とそれらの比較検討、文献研究の跡付けのための現地調査を2つの柱とし、それらの成果を連携させて研究を進めた。文献研究はテーマ(地域)毎に、収集 データベース化 解読 分析の手順で行い、既に本研究に先立ってある段階にまで進んでいるテーマについては、それを継続する形で行った。文献研究が一定の仮説を提出できるレベルに達した段階で、現地調査によってその跡付けを行った。しかしながら、研究成果の(2)でも述べるように、当初の予測よりも現地見聞による成果が大きかった場合は、状況に応じ

て方向修正を行い、その後の文献研究にもそれを反映させていった。それぞれのテーマに関して一定の結論を得、今後の見通しが立った段階で比較研究を行った。

平成 26 年度は、研究目標(1)に関する史料収集とデータベース化を行った。申請者はこれまでの境界領域研究において、アラビア語・ギリシア語・シリア語の史料、イスラーム史・ビザンツ史・シリア教会史に関する研究書や論文を取得し、それらを用いて研究を進めてきた。従って、当該研究課題に関する史料・文献収集はまずアルメニア語史料及びそれらの翻訳書、中世アルメニア史関連研究書を収集し、それらから得た情報を順次データベース化を試みた。また、(財)東洋文庫等国内の資料館・図書館に所収されているアルメニア語史料・文献の調査・収集を行った。

また、境界領域(アナトリア東部)のキリスト教会とキリスト教徒社会の動向に関する史料分析を行った。このテーマに関する情報は、申請者が境界域研究を推進してきた過程で収集したアラビア語・ギリシア語・シリア語史料の中に散在している。従って、新たな史料収集というよりは、各史料に散在する情報を抽出して分析した。その成果は[学会発表]において口頭発表した。

平成 27 年度においては、平成 26 年度の文献収集と境界領域研究を踏まえて、研究目的(2)ファティマ朝期のアルメニア人ネットワークを中心に検討を行った。ファティマ朝時代のエジプト史に関するアラビア語史料や研究書・論文を網羅的に検討し、エジプトにおけるムスリム、アルメニア人有力者及び軍人、コプト教徒の関係について多言語にわたる文献研究を行い、ファティマ朝時代の東地中海域のアルメニア人・ネットワークの重要性について多角的に検討した。また、平成 28 年 2 月末から 3 月に、文献研究の跡付けを行うため、エジプトにおいてナイル川上流域から下流域まで史跡・遺物を辿り、地形や自然環境・地政学的状況を見聞する現地調査を行った。

平成 28 年度には、研究目的(1)の文献研究をさらに進めると共に、研究目的(3)の文献研究を行なった。後者に関しては、史料収集の過程において、イェルサレム王国内部のフランク人、ムスリム、現地キリスト教徒の関係に注目することが重要であるだけでなく、ラテン語等の豊富な文献も存在することが判明したため、パレスティナにおけるキリスト教徒ネットワークに重点を置く形に文献研究の方向を修正した。研究方法の枠組みは変えず、平成 28 年 8 月にイスラエル(パレスティナ)において現地見聞を行い、イェルサレムや沿岸港湾都市などの都市部だけでなく農村部に関しても、史跡・遺物を辿り、地形や自然環境・地政学的状況を見聞する現地調査を行い、

さらに現地研究者との交流も計った。以上の研究から得られた成果は平成 28 年 1 月の[学会発表]で公表した。

以上の、ビザンツ境界領域(アナトリア東部からイラク北部)、エジプト、パレスティナに関するマイノリティ・ネットワークを総合的に比較検討する中から、西地中海についても知見を得る必要があるという認識を持ち、レコンキスタ進行中のイベリア半島のムスリムとキリスト教徒の関係史、そこに対する北アフリカのムスリム勢力の影響等について付加的文献研究を行い、平成 28 年 12 月から 29 年 1 月にかけてその跡付けのために、モロッコとスペインにおいて現地調査を行った。

以上のように、複数の地域を選択して文献研究と現地における跡付け調査を行い、それらの成果を比較検討することによって、中世東地中海におけるマイノリティ・ネットワークの総合的研究を行った。

4. 研究成果

本研究の成果を纏めると以下の通りである。

- (1) 境界領域におけるキリスト教徒は、教会や修道院を拠点としたネットワークを保持・拡大して地域社会で独自の地位を確保していただけでなく、ムスリム領域中央部の情報にも通じ、その政治・社会・文化的動向に敏感に反応していた。時にはムスリム社会の趨勢を利用して理論武装し、自己の権利を主張することもあった。これに関しては、平成 26 年度に 3 つの学会発表を行い、平成 27 年度に雑誌論文を発表し、さらにそれをイスラーム法の庇護民規定の形成と発展と関連づけて展開させ、その成果を学会発表で発表した。
- (2) ファティマ朝時代のエジプトにおけるアルメニア人マイノリティのネットワークと彼らの政治的・軍事的影響力については、当初念頭に置いていた首都カイロ及びアレクサンドリア等の下エジプトの沿岸都市部だけでなく、アルメニア系宰相が積極的に推進したヌビア地方への領土拡大政策と相まって、上エジプトにもその影響が波及していたことが文献研究と現地調査によって明らかになった。アルメニア系の宰相・政府高官・軍人の活動は、行政や軍制の再編に貢献しただけでなく、建設事業・宗教的宣教活動など文化面でも確認された。それらは個人の事績とみられてきたが、アルメニア人・ネットワークがそれらを支えていたことが明らかになった。この成果に基づきさらに研究を進める予定であるが、それには今まで以上に準備を周到に行い、精緻な現地調査や他分野(考古学や

- 建築学など)の研究者との連携研究が必要と考えられる。
- (3) イェルサレム王国におけるキリスト教徒ネットワークについては、2つの方向性が見いだされた。

支配者ではあるが、人口統計的にはマイノリティであったフランク人入植者の、都市部・農村部に双方におけるネットワークとその相互関係の研究の重要性がわかり、聖墳墓教会がフランク人による農村部支配の1つの核となっていたことが文献研究から解明され、現地調査でも跡づけられた。その成果は学会発表において公表した。現在さらに研究の幅を広げるため、考古学研究者・建築史研究者との共同研究を推進中であり、論文または共著書として刊行を準備している。

政治的にも人口的にもマイノリティであった十字軍国家内の現地キリスト教徒に関して、彼らの社会的地位は多様であり、一元的に捉えることはできないことが判明した。

- (4) 以上の3つの地域別研究の成果を比較検討し、東地中海域におけるキリスト教徒ネットワークに関して総合的研究を行い、その中からイベリア半島やマグリブ地方も含めた地中海域全体について個別研究を蓄積し、それを総合的に検討するための方向性と今後の課題を明らかにした。3つの地域研究の成果は、既に学会・研究会における口頭発表でその一部を公表しているが、それらを総合して単著として刊行することを目指している。また、考古学・建築史など他分野の研究者と連携して共著として刊行する方向でも検討を進めている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

太田敬子「ナジュラーンの安全保障契約を巡る諸問題(3)-ムハンマドの契約書の借用と展開」『北海道大学文学研究科紀要』147(2015年12月)1-38 査読なし

〔学会発表〕(計 5 件)

太田敬子「十字軍関連史料における Beitin/ Bethel」第1回パレスティナ考古学研究会 慶應義塾大学(東京都港区) 2017年1月28日

太田敬子「アッバース朝期(9-10世紀)における ahl al-dhimmah 規定の明文化の背景とその後の展開」日本オリエント学会大会 慶應義塾大学(東京都港区) 2016年11月13日

太田敬子 Ahīqār al-Hakīm: THE STORY OF AKIR THE WISE AS A HERITAGE OF THE MIDDLE EAST?, スラヴ文献学シンポジウム『賢者アキルの物語』-中世スラヴ文学への新たなアプローチ *The Story of Akir the Wise: A New Approach to the Medieval Slavic Literature*1 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター(北海道札幌市北区) 2015年3月16日

太田敬子「9-10世紀ムスリム支配下のキリスト教徒による「イスラーム史」の借用-『シイルトの年代記』を中心として-」平成25年~28年度科学研究費補助金基盤研究A「中世キリスト教世界の多元性とグローバルヒストリーへの視角」研究会 早稲田大学(東京都新宿区) 2014年12月20日

太田敬子「「オリエント(近東)」の歴史とイスラーム史-歴史の共有と借用」日本オリエント学会創設60周年記念シンポジウム、上智大学(東京都千代田区) 2014年10月25日

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

太田 敬子 (OHTA, Keiko)
北海道大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 40221842

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3)連携研究者 ()

研究者番号：

(4)研究協力者 ()